

2022年度

一般選抜A日程

【2/5】

国語総合

(古文選択可・漢文を除く)

[60 分]

〔共通問題〕

〔一〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

天正十年（一五八二）正月二十八日、織田信長が本能寺の変で斃れるおよそ四ヶ月前に、^{（注1）}イエズス会宣教師ヴァリニャーノは、大友宗麟・大村純忠・有馬晴信らキリシタン大名の名代として、四人の少年をローマ教皇への使節としてドウハンし、長崎を出航しヨーロッパに向かった。天正遣欧少年使節として知られるこの四人の少年は、ヴァリニャーノの発案で突然に派遣が決まったものとされ、キリシタン大名らの同意があったか否かについて、議論が分かれている。

ヴァリニャーノがこの派遣を考えた理由は、ドウアルテ・デ・サンデがヴァリニャーノの命で日本のコレジオの生徒のために編纂した『天正遣欧使節記』に記されている。使節の伊東マンシヨ・千々石ミゲル・原マルチノ・中浦ジュリアンの四人が座談し、それを二人のキリシタンが聞き出すという対話形式になっているが、これによると使節派遣の目的とは、第一にヨーロッパ諸国の偉大さ、諸王の権威・権力を実見させ、第二に「キリストの御名の威望と勢力との大きさ」に触れさせて、キリスト教の繁栄と威容を悟らせ、これらを日本に伝えること、第三にローマ教皇の「聖なる御足に」日本の大名の名において「接吻」して、ローマで「日本の名を明らか」にし、教皇がその日本人を「父としての愛」の内に包摂し、キョウカの対象とすること、である。

この座談では、四人の行きの航海での体験、ヨーロッパ体験、帰りの航海での体験など豊富な体験が語られ、当時の「世界」を日本人がどのように見たかに関する貴重な史料となっている。その中に次のような一節がある。

ミゲル ……日本人には然心と金銭への執着がはなはだしく、そのためがい身を売るようなことをして、日本の名にきわめて醜い汚れをかぶせているのを、ポルトガル人やヨーロッパ人はみな、不思議に思っているのである。そのうえ、われわれとしてもこのたびの旅行の先々で、売られて奴隷のキョウガイに落ちた日本人を親しく見たときには、道義をいっさい忘れて、血と言語を同じうする同国人をさながら家畜か駄獣かのように、こんな安い値で手放すわが民族への義憤の激しい怒りに燃え立たざるを得なかった。

マンシヨ ミゲルよ、わが民族についてその概きをなさるのはしごく当然だ。かの人たちはほかのことでは文明と人道とをなかなか重んずるのだが、どうもこのことにかけては人道なり、^{（注2）}コウシヨウな教養なりを一向に顧みないようだ。そしてほとんど世界中におのれの慾心の深さを宣伝しているようなものだ。

マルチノ まったくだ。実際わが民族中のあれほど多数の男女やら、童男・童女が、世界中の、あれほどさまざまな地域へあんな安い値

で攫って行かれて売り捌かれ、みじめな賤役に身を屈しているのを見て、憐憫の情を催さない者があろうか。

(泉井久之助他訳「デ・サンテ天正遣欧使節記」)

この記事を記したイエズス会の直接的な狙いはキリスト教世界の情宣にあるだろう。即ち、奴隷を許容しないと自称しているキリスト教文明の優越を、日本で行われている奴隷売買を引き合いに出して強調することである。もちろんヨーロッパでも、そしてイエズス会においても現実は奴隷売買が許容されていたことは、高瀬弘一郎氏の指摘される通りである(高瀬「キリシタンの世紀」)が、情宣の意図は日本で行われている奴隷売買を批判することにあつたといえよう。

しかし少年使節らの発言にも注目したい。少年使節にとつて、旅先でみた「奴隷のキョウガイ」に落ち「家畜か駄獣かのように」扱われている日本人が赤の他人であることは間違いない。その赤の他人に彼らが同情し、売った日本人に対して義憤を感じているのは、この奴隷たちが「血と言語とを同じうする同国人」であるという認識によることは間違いないだろう。「わが民族中の」「多数の男女やら、童男・童女」に「憐憫の情を催す」という原マルチノの発言も同様である。彼らは「血と言語とを同じうする」「同国人」「わが民族」という認識によつて共感と同情とを表明しているのである。ここには見えず知らずの「奴隷」たちに対して少年使節らが有していた「同じ日本人」という感情的なつながりを明らかにみてとることができよう。

もちろん、千々石ミゲルの発言にしろ、原マルチノの発言にしろ、その発言はイエズス会の手で検閲ないし改竄された、いわばチヨウセイされたものであることは当然にも想定される。「同じ日本人」という民族感情の表明はイエズス会自身が、そして「最古の国民国家」としての歴史をもつポルトガル人がもつていた観念を基にしているとみることが出来る。しかしその場合にも、この「対話」が日本人のキリシタンを対象に作成された以上、イエズス会からみて日本人の共感を呼ぶものと認識されていた論理によつて作成されていることは間違いないといえよう。少なくともヨーロッパ人であるイエズス会宣教師らは、日本人の間に「我々は同じ日本人」との感情が存在すると考えていたとみてもよいのではないか。

一方、日本人の間では、キリスト教伝来の当初から、これを「外国の宗教」とみなし、伝統的に行われていた神仏の信仰を「日本の宗教」とする考え方が一般的にみられた。宣教師たちが博多で布教した際、キリスト教に反対する人々の中に、「(宣教師たちが)説教によつて日本の良き習慣を破壊する」とか「同じ条件なら外国の偶像よりも自国の偶像に仕えるほうが良いと言つて聴衆に(改宗を)思いとどまらせるべく干渉した者がいたとの証言がある(一五七六年九月二十八日ベルシヨール・デ・フィゲイレド書翰、筆者訳)。「世間の人々が、どうして日本の習慣や宗教のことを何も知らぬ、無知な異国の連中のごとで大騒ぎする考えになるのか拙僧には納得がいかな」と主張してキリスト教を批判した日本人のことも記録されている(フロイス「日本史」第一部第八十四章、松田毅一・川崎桃太訳)。

キリスト教に対する反対論も、宣教師らが日本に対する領土的ヤシンをもつて布教しているとの懸念によるものが大きく、江戸幕府の禁教令にはこれが正面から表明されているし、高瀬弘一郎氏によればキリシタン自身の中にこういう見方をもつ者もいた。例えば独力でローマに留学し、司祭となったトマス・アラキもこうした疑惑をもっていた。駿府へ出向き、新大陸やフィリピンの例を挙げて布教が侵略的だと告発したキリシタンもおり、『長崎実録大成』正編・第七巻、少年使節の一人千々石ミゲルもこの疑惑から棄教したとされている。ヨーロッパ人のセイフクに抗して守るべき「日本」という観念は、この時代一般的であったといえよう。

とすれば、先にみた少年使節の発言は、イエズス会による検閲・改竄の可能性を考慮してもなお、信憑性高い「日本人」意識の表明だとみてよいだろう。とするならば、次にこうした「我々は同じ日本人」という感情が形成された条件が問題となる。その点で注目されるのは、十六世紀半ばに畿内でキリスト教の布教を行っていたガスバル・ヴィレラの報告である。ヴィレラは日本について、次のように述べている。

この日本の王国は広大であり、前述の通り六十六の王国を有する。このように（王国が）数多いにもかかわらず、言語はあまねく一つであり他の言語が混じっていない。これは、このすべての王国が聖母の団体なる教会に入り、ただちに創造主を知るに至ることの大きな、（そして）確かな兆しである。

（一五六五年九月十五日書翰、筆者記）

当時の日本が言語の面から「他の言語が混じっていない」「あまねく一つ」であるようなまとまりをもっていたというのである。もちろん、いつの時代もそうであるように、当時の日本でも地域により言葉が違っており、いわゆる「方言」があったことが知られている。「京に筑紫へ坂東さ」（京都ではどこそこ）に行く、筑紫国（現福岡県）ではどこそこ「へ」行く、関東ではどこそこ「さ」行く、と土地により言葉が違う」との諺は有名である。

しかし当時の日本語を流暢にしゃべったというヴィレラについて、同じ宣教師のルイス・フロイスが、「ガスバル・ヴィレラは）日本全国でも最も主要でどれよりも洗練された、この（都の）宮廷の言葉を非常に流暢に話し、その言葉で説教し、告解（信徒が、神と司祭の前で、犯した罪を告白すること）を聞き」（一五六五年一月二十日書翰）と述べているように、各地の言葉の間には「最も主要でどれよりも洗練された」京都の宮廷（恐らく幕府を指すと思われる）の言葉を頂点とした価値序列がゲンゼンとしてあったと考えられる。言い換えれば当時の日本では、最も中心的で公用語と目される言葉が存在していたと思われるのである。

C ヴィレラやフロイスのココクポルトガルでは、十三世紀末、既にラテン語に代わり俗語（母体であったガリシア・ポルトガル語から分化し成立したポルトガル語）が公用語として、教会文書も含め用いられていたことが知られている。一五三六年には、フェルナン・デ・オリヴェイラによる『ポルトガル語文法』が著された。これはアントニオ・デ・ネプリハによる一四九二年の『カステイリヤ語文法』と同じ俗語の文法書で

ある。書き言葉のラテン語ではない、話し言葉である俗語の文法を著すという事業は、もともと地域ごとに異なる話し言葉であった俗語に、標準的な語法を要求すること、要するに「国民」の標準語ともいべき国家の公用語が生まれる動向と軌を一にするものとされている。つまり、当時ポルトガルでは国家の公用語が歴然と存在していたのである。そのようなポルトガル出身の宣教師がみた日本の言葉の状況も、彼らの祖国と類似したものであったことが窺える。

更に加えれば、戦乱が収まったとされる江戸時代初期は、幕府や朝廷によって矢継ぎ早に史書が編纂された時期でもある。徳川家康の命で古書の蒐集・書写が行われ、『吾妻鏡』五十一冊が版行されたり、徳川家光の將軍在任中に、十七世紀後半になり版行される『本朝通鑑』の編纂が始められたりしている。また後陽成天皇の命により『日本書紀』神代卷や『職原抄』が版行され（慶長勅版と呼ばれる）、キリシタン版『太平記抜書』の底本とされる『太平記』が出版された（慶長八年古活字版『太平記』）のもこの時期である。即ち、当時の日本は、^(D)国の言葉と国の歴史を具えた国家としての内実を有していたことになる。

E 当時の日本に、公用語ともいべき言葉が存在し、国の歴史と呼ばれるものが政治を行う支配層の手で制作されていたとして、こうした動きと庶民の実情とはどの程度関わりがあったのだろうか。日本列島に住む「日本人」が公用語の「日本語」でコミュニケーションを行っていたことは大して不思議ではないかもしれない。しかし学校教育も行われていない時代に、日本列島に住む「日本人」の、いわば常識となるような歴史があったのだろうか。

歴史が国民に流布していく道筋として、大きく分けて二つが考えられる。一つは朝廷や幕府・藩などによる公的な歴史の編纂が行われ、これが正統な、いわば知の制度として教育を通じて国民に普及していくものである。しかし、公的な教育制度もない十七世紀の日本では、こうした過程を想像することは非常に困難である。もう一つは当時盛んであった演劇や出版により歴史物語が流布していく道筋である。江戸時代、京都の四条河原などの^(C)ノウリヨウの場で人々が『太平記』や『平家物語』を聴いていたこと、またこれらの物語との接触の場は中世から存在したことを想起すれば、歴史の知識が流布していくこの道筋は十分ありえたと考えることができよう。

（神田千里「宣教師と『太平記』」による）

（注1）イエズス会……十六世紀にイグナチウス・デ・ロヨラが創立した男子修道会。

（注2）コレジオ……聖職者の養成と日本人に対する西洋文化の教授の目的で設けられたキリシタンの教育機関。

（注3）賤役……いやしい仕事に従うこと、また、いやしい役務。

（注4）『吾妻鏡』……鎌倉幕府の歴史を編纂した書物。

（注5）『本朝通鑑』……江戸幕府の命により林羅山らが漢文編年体で日本の通史を記した書物。

(注6) 『職原抄』……北畠親房が漢文で日本の官職の沿革・職掌・慣例などを記述した書物。

(注7) キリシタン版……主として十六〜十七世紀、イエズス会が日本国内に印刷所を設置して刊行した活字本の総称。

問一 傍線部(ア)～(コ)のカタカナに該当する漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は、

1

～

10

。

(ア) ドウハン

1

- ① 写生旅行に持って行くガバン
- ② 日本と貿易を行ったナンバン諸国
- ③ マラソン中継のバンソウ車
- ④ ソウバン明らかになる真相
- ⑤ 一事がバンジ人任せにする

(イ) キョウカ

2

- ① 馬が好きなのでチヨウキョウ師になりたい
- ② キョウシヨウな土地を購入した
- ③ 世界キョウコウについて学んだ
- ④ 演奏会は大セイキョウだった
- ⑤ 腕力のゾウキョウに努めた

(ウ) キョウガイ

3

- ① ハンカガイへの人の流れ
- ② テンガイ孤独の身
- ③ ダンガイ絶壁
- ④ ダンガイ裁判所
- ⑤ カンガイ深げな表情

(エ) コウシヨウ

4

- ① 必要な情報のみシヨウシユツする
- ② 気の緩みが事故をシヨウライするのだ
- ③ 彼はシヨウネがすわっている
- ④ 人々が万歳をシヨウワしていた
- ⑤ 事実の公表には時期シヨウソウだ

(オ) チヨウセイ

5

- ① チヨウヘイ制のある国の若者たち
- ② 世の人のチヨウシヨウを買う
- ③ 預金ツウチヨウを確認する
- ④ 自宅近くのチヨウザイ薬局
- ⑤ 通夜にチヨウモンする

(カ) ヤシン

6

- ① 人の住まないコウヤを開拓する
- ② ヤライの雨が雪にかわった
- ③ 神社でハマヤを買いたい
- ④ 祭りのヤタイを見てまわる
- ⑤ ヤエの花びらを観察する

(キ) セイフク

7

- ① キユウセイ主とあがめられる
- ② セイチを巡礼する
- ③ 経済セイサイは避けたい
- ④ 自分とドウセイ同名の有名な人がある
- ⑤ エンセイ試合に出掛ける

(ク) ゲンゼン

8

- ① 共和国のゲンシユである大統領
- ② ゲンチを取られた不快感
- ③ 発想のゲンテン
- ④ ゲンシユクな雰囲気の儀式
- ⑤ 東の空に昇ったカゲンの月

(ケ) ココク

9

- ① 周りからココウの人と言われた
- ② コケイ燃料を買い求める
- ③ 五十年物のコシユを飲んだ
- ④ コジツに明るい人は尊敬される
- ⑤ コタイ毎の生態を探る

(コ) ノウリョウ

10

- ① 劇場にノウと狂言の公演を観^みに行く
- ② ボンノウを断つべく出家する
- ③ 固定資産税をノウフする
- ④ ノウムに視界が遮られる
- ⑤ 特異な思想にセンノウされていた

問二 二重傍線部 (a) (c) の本文中における意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は 11 } 13。

(a) 名代

11

- ① 富を有する後見がいる人
- ② 目上の人の代理を務める人
- ③ 地位を超えた能力を備えた人
- ④ 地域からの評価が高い人
- ⑤ 集団を代表して立つ人

(b) 情宣

12

- ① 多数の意思や期待に対応した言動
- ② 人々の抱く気持ちを伝達する行動
- ③ 他者と他者との交流を促す働きかけ
- ④ 情報を多くの人に知らせる活動
- ⑤ 第三者の感情に強く働きかける広報

(c) 矢継ぎ早に

13

- ① 時々とぎれながら続いて
- ② 仕上がりよりも早さを求め
- ③ さし迫り追いつめられて
- ④ 密に連携をはかりながら
- ⑤ 続けざまにすばやく

問三 傍線部(A)「わが民族への義憤」とあるが、『天正遣欧使節記』にうかがえる千々石ミゲル・伊東マンショ・原マルチノの心情として適切でないものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 14。

- ① 外国には売られて行く同国人に僅かばかりの情けをも掛けない日本人がいる現実を、日本国内にいる人に知られてはならない。
- ② 自身と同国人である日本人達が、どうして同じ民族の人身の売買を行うのか到底、理解し難い。
- ③ ヨーロッパにおいて日本の名を辱めるような行為をする日本人は許し難い。
- ④ 日本国外でのことであるとしても、売られていく日本人の奴隷達に哀れみを感じないわけにはいかない。
- ⑤ ヨーロッパの人たちに理解されないような人の売り買いの行為に手を染める日本人は、非難されてしかるべきである。

問四 傍線部(B)「先にみた少年使節の発言は、イエズス会による検閲・改竄の可能性を考慮してもなお、信憑性高い「日本人」意識の表明だとみてよいだろう」とあるが、このように判断する理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 15。

- ① イエズス会自らが編纂した史料に、原マルチノの「世界中の、あれほどさまざまな地域へあんな安い値で攫って行かれて売り捌かれ、みじめな賤役に身を屈している」人がいるという一節があり、奴隷売買を許していたイエズス会の不都合な真実も記されているから。
- ② 使節の少年たちが旅先で目にした赤の他人である「奴隷」の日本人たちを、自分たちと「血と言語とを同じうする同国人」と実感し、「憐憫の情を催」し義憤に駆られたと記す史料に、誤った情報が差し挟まれる余地はほばないと見て構わないから。
- ③ イエズス会編纂の『天正遣欧使節記』であるが、当時の日本国内にキリスト教への根深い反対論があることを踏まえた上で、使節団の日本人の少年たちが共感や同情を以て、奴隷となった日本人たちを同じく血や言語を有する同国人だと認識したと記録しているから。
- ④ 日本人の僧侶が博多の宣教師たちを「無知な異国の連中」と批判し、同じく信仰を寄せるにしても「日本の宗教」の神仏以上に信ずる理由は何ら見出せないと主張した、という不利な証言を記した書翰までも、イエズス会側の編集した報告集には収載されているから。
- ⑤ 『天正遣欧使節記』は、日本人の金への執着心の強さや、日本人同士の人身の売買を醜く汚れた行為であると非難した千々石ミゲルの証言までも、隠すことなく事実のままに書き留めていると考えられるから。

問五 空欄 C・E に入る語として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は C は 16、E は 17。

- ① 察するに ② それでは ③ ともすれば ④ こうした ⑤ ところが ⑥ 因みに

問六 傍線部(D)「当時の日本は、国の言葉と国の歴史を具えた国家としての内実を有していたことになる」とあるが、このように考える根拠として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 18。

- ① ポルトガルにおいてポルトガル語が「国民」の標準語として位置づけられて行った過程と同様に、日本においても俗語の標準的な語法が整理され、その言語を以て『吾妻鏡』、『本朝通鑑』、『日本書紀』神代巻、『職原抄』等の書物が編纂され、出版されたから。
- ② 江戸時代初期の日本では、中心的な公用語と位置づけられる言葉が成立していたと推定され、かつ朝廷や幕府といった支配層により歴史に関する様々な書物が編纂され、それらの書物の出版も盛行していたから。
- ③ 十七世紀の日本列島では、まだ庶民に対する学校教育は行われていなかったが、『吾妻鏡』や『太平記』といった日本中世以降の歴史認識を提示した書物が既に相当程度、人々に読まれていたという実態があったから。
- ④ 日本の正当な歴史観を示したと目される『太平記』が、十六世紀初頭にイエズス会の先導により『太平記抜書』というダイジェスト版に再構成され、日本語の活字本として出版され人々にひろく享受されていたから。
- ⑤ 京都の宮廷の言葉が公用語として、日本各地のあらゆる階層の人々に認知されており、幕府が関与した出版事業により、正史とも位置づけられる日本の歴史が国中に定着しつつあったと想定されるから。

問七 傍線部(F)『太平記』や『平家物語』は、どのような役割を果たした書物と想定されるか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 江戸時代の京都周辺の人々に、文学としてではなく耳で、また観て楽しむ演劇として、日本の歴史に気軽に触れる機会を提供した。
- ② 歴史を語る物語としての文学ジャンルを確立させることよって、日本の人々が歴史の知識に触れる機会を増やした。
- ③ 江戸幕府のような政治的支配層に史書を普及させる契機をもたらした。日本の人々が自然と国家を意識するように導いた。
- ④ 後の公的な教育制度にかわり、日本中世以降、必ずしも文字言語を介さずとも、徐々に日本の国民に歴史の知識を浸透させていった。
- ⑤ 軍記物語という歴史と文学とを混在させる分野の書物の編纂を促し、江戸時代における演劇や出版文化の隆盛をもたらした。

問八 本文の内容と合致するものを次の中から二つ選び、番号で答えなさい。ただし、解答順は問わない。解答番号は ・ 。

- ① ヴァリニャーノは天正期に、ヨーロッパ諸国においてキリスト教への信仰が深く根ざしていることを伊東マンシヨら四人の少年の目で確かめさせ、ローマ教皇の偉大な愛の内に日本の人々をひざまずかせ従えるという生来の悲願を叶えるために使節団の派遣を計画した。
- ② 十三世紀末から十六世紀前半にかけて、ポルトガルではキリスト教布教の便宜から、国家の一定の統制のもとで徐々に公用語が書記言語であるラテン語から、話し言葉でありかつ俗語であったポルトガル語に置き換わっていった。
- ③ 『天正遣欧使節記』の様々な記述や文脈は、イエズス会の宣教師たちが有していた思想の反映、また彼らの目的とした布教の意識のもとで出版された書物であることを想定した上で読み解いていかななくてはならない。
- ④ 日本近世期全般における演劇や出版といった文化現象を捉える上で、『太平記』や『平家物語』といった軍記物語の作品への注目が重要であり、キリスト教の宣教師たちはその重要性にいち早く気づいていた存在であった。
- ⑤ 天正遣欧少年使節の四人の少年達により、往復の航海やヨーロッパでどのような体験をしたかが『天正遣欧使節記』には語られており、使節の日本人である少年ら自身が「世界」と理解した日本以外の地域への意識や見方が、彼らの感じたそのままに記されている。
- ⑥ キリシタンの中には千々石ミゲルのように、キリスト教の布教活動の背後に、「外国の宗教」による「日本」の土地の統制や統治の目的を感じ取り、自らのキリスト教への信仰を捨て去るほどに疑いを持ち始めた者もいたと言われている。

〔選択問題〕〈現代文〉か〈古文〉かの、どちらかを選択して、一方のみを答えなさい。

〔二〕〈現代文〉次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

小学生の頃、よく野球盤で友だちと遊んだ。パチンコ玉のようなボールをピッチャーが投げて、もう一人が野球盤に固定されたバットでタイミングよく打ち返すというゲームである。ところが、このゲームのピッチャー側には、秘密兵器の「消える魔球」が用意されている。これは野球盤のホームベースの前に切れ込みがあり、それが下がって、ボールが床下に消えてしまうというものである。これをやられるとバッター側はもうお手上げだ（消える魔球をボールが落ちる前に無理矢理打つという強者もいるにはいたが……）。野球の勝負の醍醐味が、いかにピッチャーの球にタイミングを合わせて打ち返すか、だとするならば、消える魔球はその勝負にどっかのおっさんの茶々が入るような仕組みである。なんで、こんな「おっさんの茶々」を許すような仕組みになっているのだろうと思わないでもないが、野球盤に「消える魔球」が登場して以来、なくなることなく現在に至っており、どこか人の心を魅了する部分があるのだろう。

科学というと、この世にある法則や原理の発見など、世界の真理や真実を解き明かしていくというイメージが強いものである。しかし、この世の真実、つまり「正しい」ことは、一体、何なのか？ 以下、屁理屈のような話が続くことになるが、これは実際、単純な話ではない。たとえば「リンゴが木から落ちる」という現象がある。これはニュートンが万有引力を発見したきっかけとなったとされる「由緒正しい」物理現象であるが、この「リンゴが木から落ちる」というのは、正しいのだろうか？ もし、正しいとするならば、それはどうしてそう言えるのだろうか？

人間が把握できることというのは、基本的に経験から来ており、「リンゴが木から落ちる」ことが正しいと信じられているのは、リンゴを枝から切り離せば地上に落下するということを、これまでずっと人類が経験してきたからである。そして、そこからニュートンは、万物はすべて互いに引き合っているという、「リンゴと地球」の関係だけに留まらない、たとえば星と星の関係のような、より I 的な現象に適用できる「万有引力の法則」を発見した。そしてそれが今では物理学上の「正しい」法則と信じられている。この例は科学的な「正しさ」についての非常に重要な二つの考え方を含んでいる。

一つは「繰り返し起こることは法則化できる」という考え方である。そして、もう一つは「法則化できたことは、他の現象にも応用できる」という考え方である。これらは「帰納法」および「演繹法」と呼ばれる論理であり、科学を支える非常に重要な考え方となっている。リンゴはいつ見ても、木から切り離されれば、地面に落ちるし、それを地球とリンゴが引っ張り合った結果と考えると、より多くの現象にも同じ考え方を適用できるようになる。実際、その法則を使えば、惑星や彗星の動きまで正確に予測できるようになるのだから、それは確かに素晴らしいこ

とである。

しかし、帰納法というのは単純な理屈の上から言えば、さほど根拠がしっかりした考え方という訳でもない。たとえば、昨日、阪神が勝っていたとする、そしてなんと今日も勝っているではないか。帰納法が成り立つなら、明日も勝つし、明後日も勝つ。おお、秋には道頓堀だ――！という理屈が成立するか、という話である（ちよつと違うか？）。これまでそうだったから、この先も必ずそうなるという理論は、一般的には成立しない。では、リングはいつ見ても地面に落ちるが、それはこれまでの観測ではそうであっただけで、この先、落ちないことが起こる可能性はまったくないのだろうか？ ないと言うなら、どうしてそう言えるのだろうか？

実は帰納法と演繹法が世界を説明する論理として成り立つためには、重要な前提がある。それはこの世界は同じことをすれば、同じ結果が返ってくるようにできている、という仮定である。別の言葉で言うなら、この世は、ある種、機械的な「法則」により支配されているという仮定だ。この前提で考えれば、事例を集めて「法則」の発見にたどり着けば、その後はすべてそれに従って現象を説明・予測できることになる。この前提は「神々が支配していた世界」から、人類の理性で世界を説明できるとする「理性が支配する世界」へのパラダイム転換に伴って得られたものであり、現代科学の根幹となっている。この前提が絶対的に正しいのか、それは誰にも分からない。ただ、それに基づいて構築された近代の科学は、この世の多くのことを説明・予測するのに成功し、実際に役立ってきた。この世には消える魔球もおっさんの茶々もなく、同じことをすれば、同じ結果が返ってくるようにできている、だから世界は説明できる、と現代人は信じている。私も科学の世界に身を置く者の一人として、大筋でこの世界観に異論を持つ訳では、もちろんない。そう、だからリングは木から落ちてきたし、今からも落ち続けるはずなのだ。

しかし、少しだけ待つて欲しい。本当にリングはこの世でいつも同じように地面に落ちるだろうか？ 物理学では地球上における物体の落下速度（ v ）は、初速が0であれば、 $v = gt$ （ g は重力速度、 t は時間）で与えられるとされる。だが、地球上のどこでリングを落としても、この公式通りにリングは落下などしはしない。それは空気抵抗があるからである。もつと言えば、たとえば台風の風で落ちるリングを見てみよう。場合によっては、リングは落下どころか風に飛ばされ舞い上がるかも知れない。こんなことを書いていたら、何をバカなことを言っているのだ、そんなことは当たり前ではないか、重力加速度通り（法則通り）の速度を計測したいのなら、真空条件でやらないといけないに決まっているだろうと、物理学の先生に笑われるのがオチである。しかし「そんなバカなこと」を大真面目にやっているのが、同じ科学と言っても、たとえば生命科学である。

それはどういう意味か？ 一例を挙げれば、あるウイルス病の薬としてウイルスの細胞への侵入部位であるレセプターとウイルスの結合を阻害する薬があったでしょう。ウイルスとレセプターとその薬だけを試験管内で混ぜれば、なんと百発百中結合を阻害する。すごい薬ができた、喜んで患者にその薬を投与してみたら、10%の人にしか効果がない、というようなことが、普通に起こるのだ。つまり「法則」的な意味では（試験管の中では）100%効果がある薬の効き目に「茶々を入れるおっさん」が、現実の人間の体の中にはいる。「消える魔球」のように薬の

効果が消えてしまうのだ。

その理由は、たとえば、せつかくの薬を分解して体外に排出してしまう酵素の力であったり、薬を患部までうまく運ばないという問題であったり、薬の効きを阻害する物質が細胞の中にあつたり、あるいはウイルスのレセプター自体に人によって微妙に異なつたいくつかの種類があつたり、といったような様々なことである。そういった多くの要素が、その個人の持つ遺伝子のタイプ、年齢や性別、あるいは食べ物や環境といったものたちの影響を受けて、患者一人一人で違つてゐる。その影響で薬の効き目も違つてくる。それは本来、地球の中心に向けて重力加速度に基づき真つ直ぐに落下するはずのリンゴが、現実の世界では空気抵抗や台風の風で、理論通りには落ちてこないことと、基本的には同じである。

それじゃ、リンゴの落下実験で真空にしたように、細胞の研究でもそういった攪乱要因を取り除けばいいじゃないか、複雑な現象を単純化して、その中にある「法則」を見つけ出すのが科学じゃないか、そう言う人もいるだろう。まったくもつて、ごもつともな意見である。しかし、この問題が深刻なのは、現実の生物・細胞を使った研究などでは、攪乱要因の数があまりに多く、それらを完全に排除した状態を作ることが、実務上、不可能に近いという点である。あちらこちらに「おっさん」がいて、茶々を止めないのだ。

また、もう一つの問題は、そういった攪乱要因を取り除けば取り除くほど、現実から離れていってしまうというジレンマである。極端な話、試験管の中でウイルスとレセプターと薬のみを入れれば、「科学的な真理」を得られるかも知れないが、人に投与して効き目がなければ、そんな「真理」は役に立たない。ニーチェは「ツアラトウストラはかく語りき」で「神は死んだ」と宣言したが、どっこい「茶々を入れるおっさん」は生きている。それが現実の世界であり、そこで通用する科学は茶々の存在を前提にしたものでなければならぬ。

この「おっさんの茶々」問題は、科学を考える上で、実は一つの重要なポイントである。最初に書いたように科学的な物の考え方への基礎には、この世界は「法則」に支配されており、同じことをすれば同じ結果が返ってくるという前提がある。そうであるなら、「正しい」ことというのは、1足す1が2になるように、常に、100%正しいものとして与えられるはずである。しかし、現実の世界では、同じことをしても同じ結果が返つて来ない（正確に言えば、まったく同じ条件を2度作ることが現実的にできない）。

従つて、そういった現実的な問題に対する科学的な知見というのは、「これまでどのくらい、この薬の使用例があり、そのうちのどのくらいの人で効果がありました」というようなⅡ的なものにならざるを得ない。つまり「この薬はこの人のこの病気に効くのか？」といった現実的な命題に対する科学的な回答というのは、たとえば「60%の確率で効果がある」というような確率的なものになってしまう。Yes/Noで答えるとするなら「分からない」である。

批判を承知で単純化して言えば、科学には実は性格の異なつた二つのものがあるのだ。一つはこの世の真理を求め、単純化された条件下で100%正しいような法則を追い求めるもの。そしてもう一つは元来、100%の正しさなどあり得ない、茶々を前提とした、より現実的なもの

のである。このかなり性格の異なつた二つのものが、「科学」という名の下でごつちやになつてゐる。特に前者の「科学」が持つ、この世界の真理や真実を解き明かしていくというイメージは、あたかもその対象が何であつても「正しい」「ことと」「正しくない」ことを判定し、明確な回答を与えてくれるような期待を抱かせる。

しかし、実情を言えば、一般に思われているより遥かに多くの「科学」が後者のグループに属している。特に、人の生活に密接に関連するような話は、ほとんどがそつである。つまり「100%の正しさ」など元々ない。

(中屋敷均『科学と非科学 その正体を探る』による)

(注1) 道頓堀……大阪市中心部にある地名。本文ではプロ野球の阪神タイガースが優勝することを比喩的に表現している。

(注2) レセプター……生物の体にあつて、外界からの刺激を受容する器官や細胞。受容器。

問一 波線部(ア)・(イ)の語の本文中での意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は、

(ア)は ・(イ)は 。

(ア) 醍醐味

- ① 最もすぐれたところ
- ② 極端に難しいところ
- ③ 一番肝心なところ
- ④ 最高におもしろいところ
- ⑤ とても好ましいところ

(イ) パラダイム

- ① 人や時代を超えた普遍的な考え方
- ② 特定の人だけが持つ独特な価値観
- ③ ある時代における考え方の枠組み
- ④ 世界を成り立たせる絶対的な法則
- ⑤ その時代の人々から見た世界の状況

問二 空欄 に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 必然的
- ② 原始的
- ③ 可及的
- ④ 横断的
- ⑤ 一般的

問三 Wさんは、二重傍線部「帰納法」・「演繹法」について本で調べ【メモ】にまとめた。そして【メモ】をもとに、傍線部(A)「リンゴはいつ見ても、木から切り離されれば、地面に落ちるし、それを地球とリンゴが引つ張り合った結果と考えると、より多くの現象にも同じ考え方を適用できるようになる」の内容を説明しようとした。【メモ】をもとにした傍線部(A)の説明として適切なものを、次の中から二つ選び、番号で答えなさい。ただし、解答順は問わない。解答番号は 25・26。

【メモ】

○「帰納法」「演繹法」とは何か

帰納法……複数の現象から共通事項を抽出し、その共通事項から結論を導く論理展開。

演繹法……誰もが正しいと考える事実(大前提・小前提)を元にして、必然的に妥当な結論を導く論理展開。

例 [大前提] 哺乳類は肺呼吸をする ↓ [小前提] 人間は哺乳類である ↓ [結論] 人間は肺呼吸をする

- ① 「リンゴはいつ見ても、木から切り離されれば、地面に落ちる」というのは、帰納法における「複数の現象から共通事項を抽出し」という内容に対応する。
- ② 「リンゴはいつ見ても、木から切り離されれば、地面に落ちる」というのは、演繹法における「誰もが正しいと考える事実(大前提・小前提)」という内容に対応する。
- ③ 「地球とリンゴが引つ張り合った結果」というのは、帰納法における「複数の現象から共通事項を抽出し」という内容に対応する。
- ④ 「地球とリンゴが引つ張り合った結果」というのは、演繹法における「誰もが正しいと考える事実(大前提・小前提)を元にして」という内容に対応する。
- ⑤ 「より多くの現象にも同じ考え方を適用できるようになる」というのは、帰納法における「複数の現象から共通事項を抽出し」という内容に対応する。
- ⑥ 「より多くの現象にも同じ考え方を適用できるようになる」というのは、演繹法における「必然的に妥当な結論を導く」という内容に対応する。

問四 傍線部(B)「そんなバカなこと」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

解答番号は 。

- ① この世界で起こる些細なことに目を向けて科学的な視点で検証すること
- ② 自明のことで無視してよいようなことを取り上げて科学の対象とすること
- ③ 生命をとりまく様々な条件を加味した上で科学的な法則を確立しようとする事
- ④ 現実世界で起こりうる様々なことを考慮しながら科学的な追究を行っていること
- ⑤ 法則化をする際に現実世界では起こりえないような状況をふまえること

問五 空欄 に入る最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 統計学
- ② 自然科学
- ③ 心理学
- ④ 環境学
- ⑤ 社会学

問六 本文では読み手に親しみを与えようと「おっさん」や「消える魔球」といった言葉が比喩的に用いられている。これらの言葉の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 29。

- ① 本文において「おっさん」は、神の存在に代わって科学的真理の真偽を審判する存在の比喩として用いられている。一方、「消える魔球」は、そのような存在が不在となることで科学的真理の真偽が揺らいでいる状況の比喩として用いられている。
- ② 本文において「おっさん」は、科学において良い結果を出そうとする際に邪魔をしようとする存在の比喩として用いられている。一方、「消える魔球」は、科学においては必ずしも良い結果が出るとは限らないという現状の比喩として用いられている。
- ③ 本文において「おっさん」は、科学的な真理を探究する際にそれを阻害する外的要因の比喩として用いられている。一方、「消える魔球」は、そのような外的要因によって理論的には得られるであろう結果が得られなかった状況の比喩として用いられている。
- ④ 本文において「おっさん」は、科学的な実験を行うにあたって実験を攪乱する要因の比喩として用いられている。一方、「消える魔球」は、攪乱されたことよって実験の結果が信用にたまるものではなくなってしまったことの比喩として用いられている。
- ⑤ 本文において「おっさん」は、科学において100%正しいとする見解に異論を唱える存在の比喩として用いられている。一方、「消える魔球」は、そのような異論が生じたことよって見解が覆されてしまった状況の比喩として用いられている。

〔二〕〈古文〉次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

よろづの事よりも情なまけあるこそ、男(A)はさらなり、女もめでたくおほゆれ。(注)なげのことばなれど、せちに心に深く入らねど、いとほしきこと(B)をば「いとほし」とも、あはれなるをば「げにいかにも思ふらむ」など言ひけるを、伝えて聞きたるは、さし向かひて言ふよりもうれし。(1)いかでこの人に、思ひ知りけりとも見えにしがなと、常にこそおほゆれ。

かならず思ふべき人、とふべき人はさるべき事なれば、(注)とり分かれしもせず。(2)さもあるまじき人の、さしいらへをもうしろやすくしたるは、うれしきわざなり。いとやすき事なれど、(3)さらにえあらぬ事ぞかし。

おほかた心よき人の、まこと(D)にかどなからぬは、男も女もありがたき事(X)なめり。また、さる人もおほかるべし。

〔枕草子〕による

(注) なげのことば……何でも無い無造作な言葉。

とり分かれしもせず……特別なことではない。

問一 傍線部(A)～(D)の語句の意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は

30) 33。

(A) さらなり

30

- ① 勝っているが
- ② 劣っているが
- ③ 格別だが
- ④ 言うまでもなく
- ⑤ 一般にそうであるように

(B) いとほしきこと

31

- ① かわいらしいこと
- ② 愛おしいこと
- ③ 気の毒なこと
- ④ 大変惜しいこと
- ⑤ 本当に欲しくなること

(C) うしろやすく

32

- ① 安心できるように
- ② 後々のことまで考えるように
- ③ 気軽な様子で
- ④ 簡単なことのように
- ⑤ 見苦しくない様子で

(D) かどなからぬ

- ① 才気のある人
- ② 周囲に角を立てない人
- ③ 物腰が柔かい人
- ④ 穏やかな雰囲気の人
- ⑤ 欠点が目立たない人

33

問二 二重傍線部(X)「なめり」の文法的説明として適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 34。

- ① 完了の助動詞「ぬ」未然形 + 推量の助動詞「めり」終止形
- ② 完了の助動詞「ぬ」未然形 + 推定の助動詞「めり」連体形
- ③ 強意の助動詞「ぬ」未然形 + 推量の助動詞「めり」終止形
- ④ 断定の助動詞「なり」連体形の撥音便の撥音不表記 + 推定の助動詞「めり」連体形
- ⑤ 断定の助動詞「なり」連体形の撥音便の撥音不表記 + 推量の助動詞「めり」終止形

問三 傍線部(1)「いかでこの人に、思ひ知りけりとも見えにしがな」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 35。

- ① 何とかしてこの人に、あなたの思いやりはちゃんとわかっていると見られたいものだ。
- ② どうしてこの人は、私の本当の気持ちを知っているなどと思っただろうか。
- ③ 一体どうすればこの人に、自分が間違えているのだと気づかせられるだろうか。
- ④ 何とかしてこの人に、私を受けたのと同じだけの辛い思いを味わわせたいものだ。
- ⑤ どうしてこの人は、私がして欲しいと思っただけのことですぐ気づけるのだろうか。

問四 傍線部(2)「さもあるまじき人」の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 36。

- ① 普段から親しくしている人
- ② 気立てのよい優しい人
- ③ 面倒見のよい人
- ④ 優しくしてくれそうにない人
- ⑤ 特別な才能には恵まれていない人

問五 傍線部(3)「さらにえあらぬ事ぞかし」の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 37。

- ① 普段から親しくしている相手であっても、自分のことを本当にわかってくれる人というのはなかなかないものだということ。
- ② 自分の間違いを素直に認めて、きちんと誠実に謝罪できるような人は、実際にはめったにいないものだということ。
- ③ 自分がしていることがどれだけ相手を苦しめているのかということに、なかなか気づかない人も珍しくはないということ。
- ④ 特別な才能など無くても、少し気をつけるだけで、相手のして欲しいことに気づくことは実はそれほど難しくないのだということ。
- ⑤ 普段は特に優しくない人が、こちらが困っている時に安心できるように気遣ってくれるというのは、極めて難しいことだということ。